

INDAS Working Papers No. 7
March 2011

伝統に携わる
—チベット難民芸能集団の現在—

Engaging in the Tradition:
How Tibetan performing Arts Group Manages Now

山本達也

Tatsuya YAMAMOTO

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」
NIHU Program Contemporary India Area Studies (INDAS)

伝統に携わる

—チベット難民芸能集団の現在—¹

山本達也**

Engaging in the Tradition:

How Tibetan performing Arts Group Manages Now

Tatsuya YAMAMOTO

This paper examines the activity and situation of the performers, especially those of Tibetan Institute of Performing Arts(TIPA),who represent the traditional culture of Tibet. To do so, I consider the global effects over Tibetan refugee society in India. As social change happened, different preferences appeared among the performers recently, for instance, preference for migration to the U.S.A This struggling situation eventually forced TIPA performers to replace their educational system with the present one. This paper focuses on the predicament of TIPA which they have to face in this global age.

本稿の目的

本稿は、北インド・ダラムサラにて活動するチベット難民芸能集団 Tibetan Institute of Performing Arts（以下 TIPA）を対象に、伝統表象に従事する彼らの活動と状況を、現在難民社会がおかれているグローバルな状況とともに描きだすことを目的とするものである。問いのかたちとしては、「グローバル化の波が、伝統を演じる者たちにいかなる影響を及ぼしてい

¹ 本稿は、2010年5月15日、東京大学で開催された「南アジア芸能から見る現在」（FINDAS 主催）での口頭発表に基づくものである。

** 日本学術振興会特別研究員（PD）

のか」「演者たちに及ぼした影響が伝統の存続にいかなる影響を及ぼしているのか」というものとなるだろう。

インドにおけるチベット難民芸能集団の来歴と活動

ダライ・ラマ 14 世がインドへ亡命した年である 1959 年、多くのチベット人が難民としてインドに亡命してきた。無論、それ以前からチベット人のインドへの移動はあったわけであるが(たとえばダージリン方面に住むチベット人)、亡命政治史において記される亡命元年は、インドでダライ・ラマ亡命政府設立が宣言された 1959 年だということになるだろう。現在、チベット難民にとっての首都として機能しているヒマーチャル・プラデーシュ州のダラムサラへダライ・ラマが移住したのは 1960 年のことであったが、それに先立って、いくつかの亡命政府機関が設立されてもいた。本稿が対象とする TIPA はそのひとつである。とりわけ、TIPA は亡命政府がはじめて設立した機関であったことから、亡命政府にとっての重要性が推し量られる。

TIPA という集団が目指すもの、それはチベット文化、とくにチベット伝統芸能を保存、促進し、チベットの独立のためのツールとすることである。TIPA の保存する伝統とは、具体的には、各地に伝わる舞踊や歌唱、劇、そして「最重要文化」と目されるチベット歌劇ラモが挙げられる。しかし、これらの演目がなぜ独立のためのツールになるのだろうか。この問いに答えるには、チベット難民や TIPA の人びとを取りまく社会的な状況を考慮にいれる必要がある。カルコウスキ[Calkowski 1991, 1997]らチベット難民研究者の多くが指摘するように、90 年代周辺の文化政治的な風潮はチベットを取りまく政治にも大きな影響力をもっていた。具体的には、文化が政治的なやり取りにおける争点となり、文化表象のぶつかり合いというかたちでチベットと中国双方の政治主張が展開される事態となっていたのである。文化の真正性が政治的主張の真正性と重ねあわされ、そのキャスティング・ボードが聴衆としての西洋社会に委ねられるという事態は、以下のような主張と結びつく。すなわち、亡命政府側からすると「中国支配下のチベットに真のチベット文化はない。中国に支配される以前にチベットから逃げだした難民たちこそが真の文化の保持者である」という主張になり¹、対して、「チベットはもともと中国の一部であった」という主張を展開する中国政府は、チベット文化を大きく中国化(すなわち漢民族化)することでチベットの独自性を否定することで、文化的にも領土的にもチベットを中国に取りこもうとしてきた²。

文化と政治が接触するこうした流れにおいて TIPA が果たしている役割はきわめて重要である。亡命政府機関である TIPA が演じるチベット伝統文化は、いわば「公定のチベット文化」であり、その文化は亡命政府の主張に則り「真のチベット文化」ということになる。そして、彼らの公演や指導を通して、難民社会はおろか、世界中に散らばっているチベット難民は「真のチベット文化」を学んでいくのである。このような状況下において、彼らの演じる伝統は、チベット難民の存在意義にかかわるものである以上、政治化を避けえない。TIPA が従事する伝統芸能とは、中国からの破壊を逃れ、自分たちの独自性を主張するために保存

¹ 詳しくは山本[2009]を参照。

² とはいえ、中国もチベットを観光の対象とするために、近年、差異を保持する方向へと転換している。

される、という「目的」の相をもつと同時に、まさにその芸能を通じて国際的なアリーナへとチベット問題をもちこむ「手段」という相をもつことになるのだ。手段と目的が合わせ鏡のように結びつくこういった様相にこそ、文化と政治が結びつく契機がある。TIPA が従事するチベットの伝統文化とは、まさしくこれらの結びつきを体現するものである。

ドラムサラで本格的に活動を開始した TIPA ではあったが、その前途は多難であった。難民という地位からも想像がつくように、人員の不足、物資の不足など、彼らは絶えずさまざまなトラブルに見舞われてきた。海外からの寄付で少しずつ生活状況が改善されても、80年代には火事で建物が全焼するなど、TIPA を取りまく状況は決して安定したものではなかったといえる。たとえば、食料をまかなうために宿舎で牛を飼育するなど、組織と伝統を存続させるために、いまでは考えられないようなさまざまな取り組みを TIPA はおこなってきたのだ。そして、少しずつではあるが、着実に彼らは前進し、現在の地位を確立するにいたる。ただ、それは必ずしも良い方向にのみ結実したと言いきれないところが皮肉なものである。TIPA のこうした足取りの変遷を追うには、彼らが採用してきた伝統教育システムに注目するのがよいだろう。次節では、伝統教育システムとそれを取りまく諸事に着目する。

変わりゆく伝統教育のありかた

1959年の設立以来、多くの演者たちが TIPA で伝統文化を上演してきた。しかし、その伝統上演を取りまく状況は大きく変化しており、それが伝統というもののありかたにも大きな影響を及ぼしているのだ。以下では大きく三つの時期に分けてその変遷を描きだしていく。

設立当初は、制度としての歴史も浅く、システムが整備されておらず、また、人員が決定的に不足していたことから、TIPA は舞踊や歌唱に詳しい人びとを各地の難民キャンプからリクルートする、という方法で演者を集めていた。その当時は難民社会の黎明期であり、多くの人びとが道路建設などに従事していた時代でもあった。とにかく、食いぶちを求めてさまよう時代であったのだ。TIPA にやってきた人たちも例外ではなく、必ずしも歌や踊りを専門とする人びとのみが集まったのではなかった。それでも、チベット文化を保存しようとする心意気のある人びとが集まって TIPA を盛りたてていた。演者として参加しない人でも、伝統の保存に役立つような物品を持っていればそれを進んで寄進するなど、直接的な伝統保存とは異なっただけで TIPA の伝統保存の一部を構成していた。このように、TIPA が保存しようとするチベット伝統とは、本土から逃げて間もない演者たちによって、そして、演者を支える人たちによって、その大枠が形成されたのである。この当時は海外公演もなく、難民社会で活動を展開する彼らは、制度としての TIPA の基盤を着実に固めていった。

インドへ逃れてくる人びとの流れは止まることなく、また、難民社会が形成されて 20 年が経過しようかという時期に、これまで成人のリクルートによって組織を構成してきた TIPA は大きな方向転換を決定する。難民社会における伝統の保存・促進をより充実させるために、難民二世らの誕生とともに、幼少期からの寄宿生活による指導を開始したのである。自分たちの手で人材を育成し、チベット伝統文化をまさに体現させようという方向を採用したことで、チベット伝統芸能の保存はますます促進された。また、1975 年以降、単発的ではあれ、TIPA の演者たちが海外で公演する機会は増えてきてもいた。難民社会とグローバルな回路

との接続が、この時期以降、加速していくこととなった。いまや TIPA の聴衆は難民社会にとどまらず、演者たちは不特定多数の人びとへとチベット文化を提示する機会を得ることになったのである。こうした状況では、幼少期からの寄宿制は、きわめて有用であった。というのも、国内だけでなく、海外でもチベットの伝統文化をみせることを意識するようになった TIPA は、音楽的な才能に加え、容姿にも重きを置くようになったからである。先行投資的な色合いはあるものの、未来の美男美女に狙いを定め、なおかつ彼らにチベット伝統文化を叩きこむのに、寄宿制以上のシステムはありえなかつたろう。金の卵の獲得を夢見て、TIPA は各地でオーディションを開催し、実際、将来的に TIPA を代表することになるさまざまな演者の獲得に成功した³。こうして選ばれた演者の卵たちは、学校で教育を受けるかわりに、毎日の練習で伝統芸能のなんたるかを叩きこまれ、エキスパートになっていく。現在、TIPA を盛りたてている演者の大半がこうした寄宿生活を経て、伝統保存活動に携わっている。長期にわたって練習をおこなってきた彼らの技量は素人目に見ても優れたものであり、実践共同体的な環境下において伝統芸能がまさに身体化されているということがよくわかる。チベット難民社会が目指す伝統文化の保存にとって、TIPA が採用した幼児期からの寄宿制での教育はきわめて有効なものであったといえることができる。

ところで、伝統文化というものは、ときがたつにつれて不可避に変化していくものである。そのため、伝統の保存にパラノイア的にこだわるのならば、より慎重にかつ高強度で保存に取り組まなければならないのは必定である。だが、TIPA が保存しようとする伝統文化を取りまく事態は、その要請に逆行するかたちで進展していく。2004 年、TIPA は十数年ぶりに新たな演者の採用をおこなった。その採用に際し、対象になったのは、幼少の子供たちではなく、高校卒業程度の学歴を有する者たちであった。いわば、第一世代の年齢より若い程度の人員がリクルートの対象となったということである。制度の方法論としては明らかに逆行しているように見えるこうした選択は、選択ミスに帰されるような単純なものではなく、難民社会の社会情勢を反映した苦渋の決断であった。その情勢とは、高学歴化と就職難であり、それと密接に関連する家族や教育を取りまく言説である。現在、難民社会の家族空間は、大いにグローバル化の影響を受けている。テレビから垂れ流されるインド映画および海外の（とくにハリウッド関連の）情報は家族空間に充満している。そこには、「家族は揃ってときをともにするものである」という「神話作用」を含蓄する記号が溢れかえっている。チベット難民社会では、学校教育においても寄宿制が採用されているが、寮生活を望まず、家族のもとから子どもを通わせる親も多い⁴。このような状況は、TIPA が採用する寄宿制、それもかなり早い段階で寄宿を勧めるそのシステムと齟齬をおこすものとなる。実際、TIPA の寄宿制は、子どもを親から奪うシステムだとして批判されてしまったのである。

また、高学歴化という状況にも TIPA の採用していた寄宿制はそぐわない。学校教育をろくに受けられない TIPA の演者たちの学歴は無に等しい。ときに教育を受ける機会がなかつ

³ ただし、この選出において、子どもたちが積極的に演者になりたがっていた、とは言い難い。ある演者は、筆者との対話において、TIPA にやってきたものたちは、いわば「親による身売り」状態であったということ語っている。

⁴ とはいえ、これは皆に共通する話ではない。とくに、チベット生まれで難民社会に拠点を移した新難民と呼ばれる人びとは、自分の手元から子どもをさっさと手放してしまうケースが散見される。

たことを嘆く演者の姿がみられることすらあった。TIPA の提示する将来像は、高学歴化が進む難民社会のなかで親が望むような子どもの将来像と合致しないのである。このような批判にさらされ、TIPA は方向転換を余儀なくされたのである。

とはいえ、高卒程度の学歴保持者の採用には、確かに一定のメリットがあった。それは、申請者自身が音楽的才能をもっているか、また興味をもっているか自覚したうえで TIPA にやってくるということであった。これまでの寄宿制の演者たちとは異なって、新たな演者は自らの意思でやってくる、そして、職業として伝統芸能に従事するということが明確になっているというのは大きなポイントではあった。だが、それでも寄宿制がもたらしていたメリット、すなわち、幼少期からの伝統の身体化、というチベット難民社会が目指す伝統の保存にとって核となる制度は完全に失われてしまう。こうした演者たちは学校教育などで伝統芸能に触れることはあれど、それがライフワークになっていたわけではなく、その芸能はあくまで趣味の領域を抜けきるものではない。それに対し、幼少期から寄宿制で鍛えあげられてきた演者たちは、その有無を言わさぬ教育もあって、伝統文化を徹底的に身体化される。その芸能は趣味という領域で語られるべきものではなく、まさに芸芸と呼ばれるにふさわしいものである。それは、上述のように実践共同体のなかで育まれたものであり、一朝一夕で身につくようなものではないのである。結果的に、2004 年以降の演者たちとそれ以前の演者たちの技量には大きな隔たりができてしまうということになった。さらに悪いことには、制度が変化したことで次世代への伝統の伝達それ自体に大きな問題が生じかねない事態となっている。

このように、教育システムが変遷することで、演者たちが伝統を身体化する度合いに大きな変化が生じている、といえる。それは、継承という観点からとらえれば、伝統というものそれ自体の存続や変更にも大きな影響を及ぼしかねないものである。

移住（に関する言説）が伝統に及ぼす影響

本節では、難民社会でもうひとつ大きな焦点となっている移住問題と、それが伝統に及ぼす影響を描きだす。

1990 年代以降、多くの人びとが欧米、とくにアメリカへ移住している。難民社会では、高学歴保持者や社会的地位の高い人間ほど早い段階で移住する傾向にあり、こうした移住者たちは、その特権を利用しているように見えたこともあって、インドに残された者たちから「道徳的に墮落している」「地位や知識のある人間が残って難民社会を引っばっていくべきなのに」などと語られてきた。実際、筆者がはじめて調査をおこなった 2002 年時点では、海外に移住する人間は批判される一方で、批判する者も本当は海外移住願望をもっている、というアンビヴァレントな状態におかれていた。しかし、2005 年の調査時以降、状況が大きく変化している。これまで後ろめたいものであった海外移住が積極的に受容され、どんどん語られるようになってきているのである。

では、そもそもどのようなかたちで難民社会における移住言説が形成されてきたのだろうか。特権的な階級の移住は別として、一般レベルでの移住言説、そして実際の移住にとくに大きな役割を果たしたと考えられているのが、マーティン・スコセッシ監督の『クンドウン』

という映画を巡っての顛末である。ダライ・ラマ 14 世の亡命をテーマにしたこの映画は、キャストにたくさんのチベット人を擁していた。なかでも、TIPA の中心的な演者がかなり多数この映画に出演している。この映画の撮影は半年以上の長期にわたり、撮影期間中、演者たちはアメリカでの生活を満喫することとなる。彼らが手にした出演料は、インドの基準からすれば莫大なもので、演者たちの懐を大いに膨らませた。そして、撮影が終わった演者たちは何をしたかといえば、概して貯蓄を好まぬチベットの人たちらしく、給料を散財し、アメリカから大量の舶来品を持ってダラムサラに戻ってきた。彼らの持って帰ってきたものはインドではなかなかお目にかかれるものではなく、多くの人びとが羨望のまなざしで見ているという。だが、彼らの多くが羨んでいたのは、そうした物質だけではなかった。クンドゥンの撮影に参加した演者たちには、アメリカの「10年ビザ」が支給されており、煩雑な手続きをすることなくまたいつでもアメリカに行ける、ということが保証されていたという。彼らが見せつける物質的な豊かさもだが、資金さえあればいつでもアメリカへと渡れるというそのことに対して人びとは羨んでいたのである。このビザを演者たちが手にしていたことがやっかみの対象となり、帰国した彼らに対して大きな批判を生んだのだ。このビザに関して、保持者と疑われた者たちからは「そんなものは存在しない」という説明がなされていたようだが、事実、クンドゥンの撮影で長期間アメリカに滞在していた演者のほとんどが、すでにアメリカにとくに苦勞することもなく移住してしまっていることから、このビザは発給されていたと考えるべきであろう（巻末資料 1 参照）。憶測の段階での批判は、実際の移住を目の当たりにした聴衆たちによって加速され、「演者たちが海外に公演に行くのは移住するコネを作るためだ」などという陰口が叩かれるようになる。しかし、こうした批判にさらされるのが撮影に参加していない演者たちであったということを考えると、そこでの TIPA 批判はきわめて理不尽なものであった。ときがたつにつれて、TIPA を批判していた本人たちが海外に移住していったことから、こうした批判は鳴りを潜めたかに思われたが、TIPA の演者が移住するたびに、「やはり TIPA にいると移住しやすいらしい」といううわさが立つことになる（表 1）。

表 1 クンドゥンの撮影に参加した演者の海外移住傾向

年	海外移住者総数	うち撮影参加者
2003	3	2
2004	2	2
2005	0	0
2006	2	1

TIPA に新しく演者たちが入ってきたのはこうした文脈のうえで、である。新しい演者は上

述の通り、芸能に関心をもって TIPA にアプローチしてきた人びとであった。だが、彼らのなかには、海外移住に関するうわさを考慮にいれて TIPA に入団した者もいる。たとえば、ある若年演者などは、「就職難だし、あとでアメリカに移住するために TIPA に入った」と、なんの銜もなく語っている。こうした人びとにとって、TIPA は次のステップに移行するための腰掛のようなものであり、TIPA がこれまで保存してきた伝統は、まさに移住のための文化資源として活用されてしまっている。こうした現状を見て、寄宿制で芸を磨いてきた演者たちのなかには憤りを隠さない者もいる。いくらグローバル化の波にさらされ、西洋的な風習が生活のなかに入りこんでこようとも、こうした演者たちのなかには、まだチベットの伝統芸能を演じることの意味を引き受けようとする者たちも多いし、彼らはおおびらに海外移住生活を称揚することに対して抵抗を感じている。しかし、新しく入団した演者たちは、伝統に対して年長者たちが政治的な目的を達成するために同じように文化資源的なアプローチをおこなうにしても、あくまでグローバル経済のなかで自分のポジションを向上させるためのツールとしてみちがっているきらいがある。このような姿勢に対し、真面目な演者たちは批判的な立場をとるのである。

だが、こうした真面目な演者たちも、移住という現実に向き合うとき、伝統というものに対するアプローチを変えざるを得なくなってくる。移住先でチベット人であることやチベット伝統文化を売りにして生計を立てることはきわめて困難であり、生活のため、インドへの送金のために多くの者がベビーシッターやファストフード店の裏方として働くことになる。筆者のチベタン・ギターの師などは、果物工場でリンゴにワックスがけをする作業に従事しており、その仕事は、伝統の保存や促進という彼らがインドにいる際に携わっていた職とは大きく異なるものとなっている。結果的に、伝統は、仕事に忙殺される彼らにとってはメインに据えられるものではなくなってしまっている。とはいえ、救いとなるのは、こうした元 TIPA の演者たちのなかに、移住先に在住するチベット人の若者たちに対しワークショップを催し、伝統のなんたるかを語り継いでいる者たちがいる、ということだろう⁵。アメリカでいえば、アメリカという地に生まれたチベット人たちが亡命政府化で提唱される「真のチベット文化」に触れる機会はどうしても限定されていたが、TIPA の人びとがグローバル経済の磁力によってアメリカに吸い寄せられたことが、逆にアメリカにすむチベット人の若者たちに学習機会を提供した、ということもできる。このような視点から見れば、ネグリとハートがその帝国論[ネグリ&ハート 2003]のなかで展開したグローバル化がもつ可能性の一端をここでは見いだせるかもしれない。だが、この話がうまくいくのは、あくまで寄宿制で徹底的に伝統を身体化された人びとが移住する限りにおいてである。高卒以降、TIPA に加わった人びとが提示する伝統は、寄宿制を経験した者からその正確性・真正性が問われるがゆえに聴衆にとってもまた違った意味合いをもち、アメリカでも違った意味をもたざるをえないことには配慮しておくべきであろう。新入りの演者と寄宿制で育った者たちを同列に語ることはできず、また、彼らも演者として過渡期であるがゆえに、何とも判断しがたく、今後の事態に注目する必要がある。

⁵ ただ、このような人びとは決して多数派ではない。とくに、進んで主催する者となるとさらに少数になる。

グローバル状況下における伝統—まとめにかえて

これまで、とくに教育システムの変遷に焦点を当て、チベット難民社会の伝統文化の牽引役を担ってきた TIPA における伝統を巡る状況の移り変わりを見てきた。彼らの伝統保存は、難民社会の文脈と密接に関連しており、それが伝統の伝達に大きな影響を及ぼしている。本稿は、伝統とその表象に従事する人びとを取りまく状況を駆け足で描きだしてきた。彼らがいかにグローバル経済と結びつき、彼らが保存する伝統というものがそのなかで翻弄され、ときには思わぬかたちで外部へ広がっていく様相の一端を提示できたのではないだろうか。

チベット難民社会における伝統舞踊を支えてきたのは、難民社会のみならず、海外からの助力でもあったことはいままでもない。西洋社会から見れば、国を追われた人びとの伝統を守る、という行為に参加することは、人道主義的な立場から見ても魅力的な選択肢だったろうし、チベットの伝統文化の破壊の根本には、そもそも共産主義勢力中国の働きかけがあるがゆえに、共産主義を嫌う冷戦構造期の自由主義圏の人びとは積極的にチベットの支援に関与したことだろう。だが、支援と同時に、海外の消費者が消費の対象として「チベット」や「チベットの伝統文化」を設定したこと、そして、西洋的ライフスタイルを志向する難民社会の言説形成が入り混じった結果、「どちらの主張が正しいのか」という政治的負荷をもった伝統は、その意味づけを経済的なものにも変化させていくこととなった。今日の伝統に携わる人びとのなかには、伝統に対する価値づけを変化させ、まさにその伝統を使って海外に移住しようとしている者もいる。これまで以上に TIPA で演じることが仕事として認識されるようになり、伝統に携わることがより剥きだしのかたちで経済にかかわるようになってきているのだ。

TIPA が設立された 1959 年 8 月からはや 52 年がたとうとしている。新たに入団した演者たちも TIPA に来て 8 年が経過しようとしている。彼らも TIPA の歴史に名を残す者たちである。彼らが、寄宿制下で育った人びとから何を学び、何を变え、そしていかに伝統と向きあっていくのか、これからも追っていきたい。

ダラムサラ (マクロード・ガンジ)



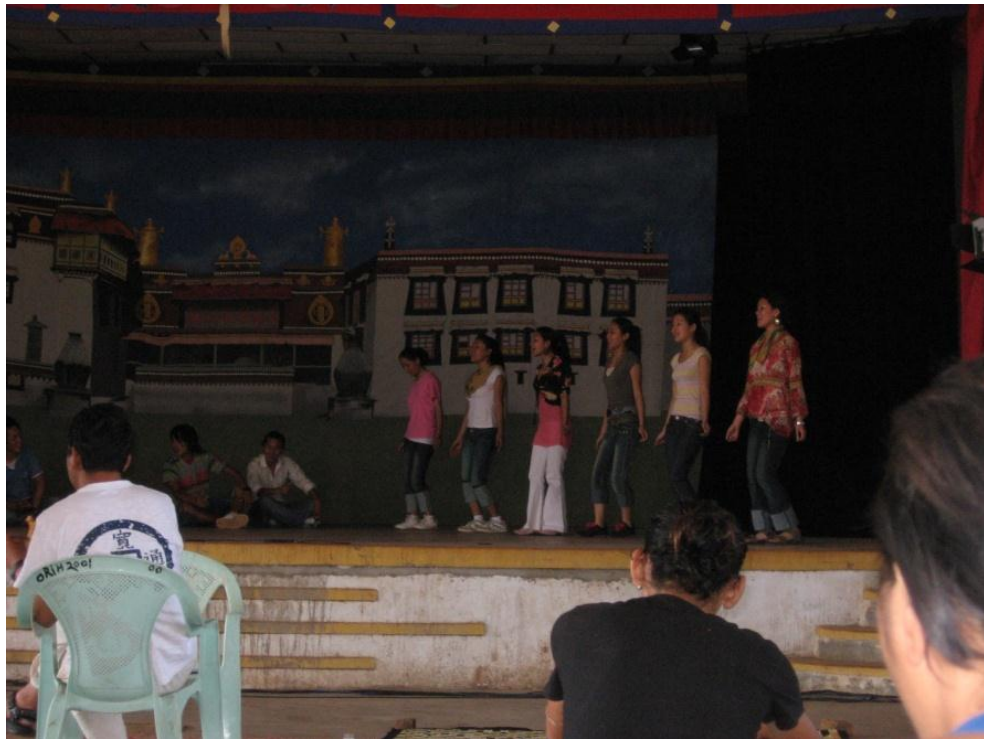
町の中心部マクロード・ガンジ



南インドの難民居住地で公演する演者たち



公演に向けてリハーサルする若年演者たち



参考文献

Calkowski, Marcia S., 1991, "A Day at the Tibetan Opera: Actualized Performance and Spectacular Discourse", *American Ethnologist.*, 18:643-57.

————— 1997, "The Tibetan Diaspora and the Politics of Performance".

In, *Tibetan Culture in the Diaspora.*, F. J. Korom (ed.), pp51-58., Vienna: Austrian Academy of Science Press.

ネグリ、アントニオ、マイケル・ハート、2003、『帝国—グローバル化の世界秩序とマルチセンターの可能性』、水嶋一憲、酒井隆史ほか（訳）、以文社。

山本達也、2009、「伝統／現代を生きるディアスポラ」京都大学大学院提出博士学位請求論文。